

データで見る大相撲 続篇
大関を最高位とした力士を眺めて見る

歴代大関は 249 人と言われている。その内、昭和元年以降に大関になったが横綱に昇進しなかった力士は、51 人。添付別表「大関を最高位とした力士たち」にまとめてみた。

(現大関の琴櫻は対象に含まない・現役の元大関5人は表に含めた)

現在の年間六場所制になったのは昭和33年(1958年)からなので、それ以前の人と以降の人とは「在位場所数」や「優勝回数」の単純比較は出来ないが、そのまま列記してある。

●大関在位場所数

大関在位場所数を5回刻みの分布図として展開してみた。前述のように年六場所制以前のデータの評価が難しいが、手を加えないことにした。この表では、現役力士である元大関は除外した。

表-1:大関在位場所数別分布

大受 増位山 五ツ嶋	栃ノ心 雅山 増位山 魁傑 前ノ山 大内山 三根山 汐ノ海 名寄岩 鏡岩	把瑠都 出島 若羽黒 松登 佐賀ノ花 清水川 豊國	琴光喜 霧島 常陸岩	琴風 旭國 大麒麟 栃光 能代湯	武双山 貴景勝 若嶋津 清国 北葉山 琴ヶ濱	栃東 豪栄道 琴奨菊 豊山	貴ノ浪 小錦 朝潮	北天佑	琴欧洲 貴ノ花		魁皇 千代大海
1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-35	36-40	41-45	46-50	51-55	56~

魁皇・千代大海の65場所が群を抜いており、その後続く貴ノ花(初代)の50場所・琴欧洲の 47 場所と北天佑の44場所が光っている。

大関在位場所が長いということだけで業績の評価をするのは早計のような気がするが、二場所連続で負越しをすると(昔は三場所だった)陥落するという地位に長く留まり続けることができたということは、それなりの力があつたからであろうと見ることもできる。しかしその反面、「のらりくらりと8勝7敗・7勝8敗を繰り返しても在位場所は伸びる」ので、評価の物差として見るのには難しさもある。

逆に、在位期間が極端に短かったのは五ツ嶋(二場所)。

五ツ嶋名良男は、その名が示すように長崎県五島列島の出身。昭和5年に出羽ノ海部屋から初土俵を踏んだ。昭和11年に新入幕、昭和15年前頭筆頭に躍進し、9勝1敗で双葉山と対戦。5回目の対戦で初めて双葉山に勝った。双葉山はこの場所優勝したが、唯一の黒星が五ツ嶋戦だった。翌場所関脇に昇進し、再び双葉山に土をつけ、「双葉山に強い五ツ嶋」と評価され、昭和27年に安藝ノ海とともに大関に昇進した。安藝ノ海は双葉山の69連勝を止めた力士。この時代、強い横綱に勝てる力士が次の時代に橋を架けたのだが、大関昇進直後の場所前の巡業で膝を痛めて途中休場、翌場所は7勝8敗と負越し、そのまま29才で引退した。祖父の書斎にあった「古今名力士伝」(のようなタイトルだった)に載っているのを読んでその存在を知ったのは六年生の頃だったように記憶している。

名寄岩は立浪部屋に所属して、双葉山・羽黒山と並び「立浪三羽鳥」と言われた。実直な人柄もあり、相手力士の「待った」に腹をたてて顔を真っ赤にして怒りを表わすことが多く、「怒り金時」と言われた。昭和18年に28才で大関昇進を果たしたが、右足の怪我により三場所で陥落。三年後に再び大関に

昇進したが、左肩の怪我がもとで再び陥落。大関を陥落した後も現役生活を続けて、昭和29年に相撲協会から特別表彰を受けた。昭和31年に40才で引退。この間の出来事を中心にした「名寄岩物語」という映画も登場した。

名寄岩の大関陥落後の活躍は、ラジオの放送・新聞の記事や映画館のニュースなどで目にしたことがある。

表の中に登場する外国人力士は、栃ノ心・把瑠都・小錦・琴欧洲。ジョージア出身の栃ノ心はサンボからの転向だったが、春日野部屋の伝統である「四つ相撲」の型を身につけており、技術的にも高いものを持っていた。しかし不調に陥ると、高い位置からまわしを取る乱暴な力相撲になるという欠点があり、それが元で怪我也多かった。ハワイ出身の小錦は、高見山を先駆けとしたハワイ出身力士の活躍時代に、巨体を利した押し相撲で列強が並ぶ中で活躍した。巨体をさらに大きくしすぎて、平時の体の安定感にも問題があり、これが壁となった。

琴欧洲は柔道からの転向だったが、長身・長脚で腰や膝が割れにくい外国人特有の問題で苦勞した。腰を割ることが出来ないと前傾し過ぎになり脆さを露呈したが、低い姿勢の確保ができると長い腕を使ってまわしを取り、強みを発揮した。殆どの外国人力士が突きあたる壁である「低い構え」「脇を締めた攻め」が克服できず苦勞した。（不祥事がもとで引退をした把瑠都についてはコメント対象外）

●優勝回数

大関を最高位とした力士の中で5回以上優勝した力士は魁皇しかいない。魁皇に続いて4回の優勝を達成したのは貴景勝だけである。

年六場所制以前の時代に3回の優勝を経験している清水川もそれに準ずる存在なのかもしれない。

清水川元吉は、大栄翔・遠藤・翔猿などを輩出した現在の追手風部屋の創始者である。相撲王国青森県に生まれ、宮相撲で活躍していたが、巡業中の二十山に見出されて大正6年（1917年）に初土俵を踏んだ。大正12年（1923年）新入幕を果たしたが一場所で陥落。すぐに再入幕を果たし実力があることを見せたが、人気に溺れて遊興に走り事件に巻き込まれて破門になった。実父が相撲協会に復帰を願い出て、自ら命を断つという事件が起きた。嘆願を受けた出羽の海親方の英断で、幕下筆頭格付出しという形で異例の復帰が叶った。改心した清水川は相撲に専念し、大正7年には関脇に昇進。しかし協会内では改革政策に伴う分裂（春秋園事件）が発生して大量の力士が離脱した。

清水川は協会に対する恩返し之机と見て残留を決意し奮闘を続けた。そして横綱不在の場所で、玉錦・武蔵山・能代潟の三大関を破り8戦全勝で優勝。翌々場所には大関に昇進し、協会を危機から救う働きをした。大正8年に離脱していた力士の一部が復帰し、相撲人気は回復した。横綱が近いと言われてはいたが、巡業中に痛めた足の影響でその後伸び悩み、昭和12年（1937年）に引退し、追手風部屋を起こした。追手風が育てた二代目清水川の力強く華麗な上手投げが好きだった。

貴景勝は、2019年五月場所に大関昇進を果たしたが、怪我により昇進直後の二場所を休場してすぐに関脇に陥落。陥落直後に10勝以上すれば復帰できるという特例により、同年九州場所で復帰。

優勝回数は4回だが、大関在位中の優勝は3回。大関在位場所数は30場所になるが、一日以上の休場をしたのは11場所（内全休は2場所）、勝越できたのは19場所。その中で三回優勝できているのは評価できるが、大関在位期間中の成績は216勝132敗102休（勝率=0.480）だった。

魁皇は、2000年九月場所に大関に昇進した。優勝5回の内4回が大関在位中の実績。強豪に囲まれていた時代なので、4回も優勝しているのに、さらにその上の地位を手にはできなかったという見方も出来るのかもしれない。

●大関在位中の成績

勝ち星は在位場所数によって大きく変る。勝ち星でトップは魁皇の524勝、続く千代大海は515勝。

これを「大関在位中の勝率」で見ると、少々景色が変わってくる。

勝率のトップは清水川の 0.643、続くのが琴風の 0.642、貴ノ浪の 0.636 となり、その後が魁皇 (0.540)、千代大海 (0.528) となってくる。

体力の限界を知って引退を決意する力士の「判断の時期」も影響してくる。低成績の時期を引きずらずに(巷間「いさぎよく」と言うが)引退した力士の方が残した成績が上になるのかも知れない。

大関在位期間中に休場のない力士は僅かしかいない。前述の清水川元吉は、12場所大関の地位にいたが、その間一日も休んでいなく、87勝47敗の実績。また鏡岩善四郎は在位6場所で36勝42敗無休、魁傑は在位9場所で70勝65敗無休。魁傑は、大関から陥落した後、平幕まで下がったが、一年後に再び大関に昇進した。さらに、引退後協会役員を務め、理事長にもなったという異色の力士。

●記憶に残った力士

小学校低学年の頃だったと思うが、吉葉山が横綱を張っていった頃に、同じ高島部屋の所属で関脇だった三根山が大関になった。静かな押し相撲と寄り身の相撲だったと記憶している。如何にも人が良さそうな表情の三根山が気にいって応援した時期があった。高島部屋は小部屋で、殆どの力士と総当たりになり、吉葉山共々苦勞していたようだった。後に東京に住むようになり、牛込に転居した時に、筑土八幡の裏手で三根山の家を見つけた時は、宝物を見つけたような気分を味わった。

琴ヶ濱という大関がいたが、四つ身のがっぷり相撲になると、機を見て放つ内掛けが素晴らしかった。新聞やラジオでは「伝家の宝刀」と表現していた。ラジオが主流の時代に、この一瞬を臨場感溢れる語る実況中継は迫力があつた。栃錦・若ノ花等の強豪が君臨していた中で、琴ヶ濱は技巧派力士として活躍した。

●大相撲鑑賞雑感

NHK の相撲中継放送や新聞等の報道を読んでいて気になっていることがある。

小結・関脇で10勝以上を上げると、「大関昇進への足がかり」として騒ぎ立てる。

そして翌場所8勝か9勝しか上げられないと、あとひとつ(ふたつ)足りなかったのも、来場所12勝か13勝すれば昇進の可能性が残っていると、数合わせの騒ぎ立てに走る。

そしてその(手前勝手な)考えに基づいて、力士たちにインタビューをする。

新小結になって緊張の中で10勝を上げた力士は、インタビューで戸惑う。そして翌場所も騒ぎ立てたインタビューや報道が続く。力士には想定外の圧力がかかる結果となり、駄目にしてしまうこともある。

中には、「俺も大関か?」と錯覚してしまうが、まだ実力が伴っていなかったということもある。

こうして伸び盛りの力士に「おかしい洗脳」をする場面が目立っている。

昭和30年代～40年代あたりのことを振り返って見ると・・・

三役に昇進した力士が8勝、9勝を上げてその地位に定着するようになる。そしてたまに10勝11勝を上げられるようになって騒ぎ縦はしなかった。何度か好成績を上げ、賜杯争いにも加わるようになると、協会内に大関昇進を考えても良いのではないかとの動きが始まる。その間に本人も少しずつそんな気持ちになっていく、という流れだったようで、マスコミが早くから騒ぎ立てることは少なかった。

昨今の動きは、教育ママが息子に対して、先回りして、先手先手と支配的メッセージを投げていく景色とよく似ているような気がする。「機が熟すのを待つ」という考え方も大事にしなければ人は育たない。大関になれる人は一握り、横綱になれる人はさらに一握り。その中で「名大関」「名関脇」と言われる存在になるのも名誉なことである。歴史に名を残す「名大関」は誰かという視点で眺めてみた。

以上

●添付資料

大関を最高位とした力士たち

力士名 (＊現役力士)	大関昇進 年-月	在位 場所数	大関在位中の実績		幕内での実績			
			勝数	勝率	優勝 回数	三賞受賞歴(昇進前)		
						技能賞	殊勲賞	敢闘賞
霧島 ＊	2023-07	6	45	0.500	2	4		2
御嶽海 ＊	2022-03	4	23	0.383	3	3	6	1
正代 ＊	2020-11	13	95	0.487	1		1	6
朝乃山 ＊	2020-07	7	51	0.496	1	1	2	3
貴景勝	2019-05	30	216	0.480	4	2	3	2
栃ノ心	2018-07	7	35	0.467	1	3	2	6
高安 ＊	2017-07	15	113	0.502		3	4	6
豪栄道	2014-09	33	260	0.525	1	3	5	3
琴奨菊	2011-11	32	256	0.533	1	4	3	
把瑠都	2010-05	15	133	0.591	1	1	1	5
琴光喜	2007-09	17	141	0.553	1	7	2	4
琴欧洲	2006-01	47	378	0.536	1		2	3
栃東	2002-01	31	207	0.460	3	7	3	2
魁皇	2000-09	65	524	0.540	5		10	5
雅山	2000-07	8	57	0.475		1	2	5
武双山	2000-05	27	186	0.412	1	4	5	4
出島	1999-09	12	100	0.556	1	3	3	4
千代大海	1999-03	65	515	0.528	3	3	1	1
貴ノ浪	1994-03	37	353	0.636	2			3
霧島(先代)	1990-05	16	139	0.579	1	4	3	1
小錦	1987-07	39	345	0.590	3	1	4	5
北天祐	1983-07	44	378	0.513	2	1	2	4
朝潮	1983-05	36	294	0.555	1	1	10	3
若嶋津	1983-01	28	250	0.612	2	3		2
琴風	1981-11	22	212	0.642	2	1	3	2
増位山(二代目)	1980-03	7	44	0.463		5		
旭國	1973-05	21	168	0.542		6		1
魁傑	1975-03	9	70	0.519	2	1	2	7
大受	1973-09	5	30	0.400		6	4	1
貴ノ花	1972-11	50	422	0.568	2	4	3	2
大麒麟	1970-11	25	189	0.513		4	5	
前の山	1970-09	10	67	0.447			3	2
清國	1969-07	28	233	0.567	1	4	3	
豊山	1963-03	34	301	0.590			3	4

栃光	1962-07	22	188	0.570			3	2
北葉山	1961-07	30	250	0.556	1		1	2
若羽黒	1959-11	13	102	0.523	1	2	1	1
琴ヶ濱	1958-05	28	185	0.440		5	2	1
松登	1956-01	15	99	0.440			2	1
大内山	1955-05	7	55	0.524			1	
三根山	1953-09	8	63	0.525	1		5	2
増位山(初代)	1949-01	4	27	0.466	2	1	1	
汐ノ海	1947-06	9	41	0.347				
佐賀ノ花	1944-01	15	101	0.543	1			
名寄岩	1943-01	6	26	0.323				2
五ツ嶋	1941-01	2	12	0.400				
鏡岩	1937-01	6	36	0.462				
清水川(初代)	1932-05	12	87	0.643	3			
豊國	1927-10	13	82	0.573	2			
常陸岩	1927-05	16	87	0.434	1			
能代潟	1927-01	22	122	0.513	1			

●参照したデータ

大相撲.jp <https://xn--psso2y7wo.jp/rekidaiRikishi/2>

日本相撲協会 <https://www.sumo.or.jp/Yokozuna/ozeki/>